

人 格 部 門

人格心理学領域における研究動向

榎 本 博 明

(名城大学人間学部)

はじめに

人格 (パーソナリティ) の研究を分類するにはさまざまな視点があるが、本稿では人格 (構造) の捉え方に関する研究、人格の発達および変容に関する研究、人格の適応・健康に関する研究といった分類枠組みに沿って最近 1 年間の人格領域の研究動向を展望することにしたい。その際に、『教育心理学研究』『心理学研究』『発達心理学研究』『パーソナリティ研究』等の雑誌掲載論文 (2004 年 7 月～2005 年 6 月) および日本教育心理学会第 47 回総会発表論文を中心にみていくことにする (以下、教育心理学会総会発表論文に言及する場合は年号を記さずポスター発表番号を記すこととする)。

I. 人格 (構造) の捉え方

1. 人格の構造や機能を表す概念の検討

最近の研究動向をみると、人格構造を表す概念に関する検討のほとんどが測定尺度の因子の検討であり、理論的に概念を検討する研究は皆無に近い。人格構造を捉える際には尺度を用いるのが一般的であるため、実際的な必要性から尺度因子の検討が中心になるのは必然であろう。だが、項目の設定の仕方によって尺度の因子構造はいくらでも変わりうるものである。したがって、尺度因子の検討の前に、尺度構成の予備段階でどのような心理傾向に網の目を張り巡らせ、どのような項目を用意するかを決定するにあたって、測定すべき概念を明確に規定しておく必要がある。これは当然のことではあるが、はじめに尺度ありきといった観があり、尺度が乱立している現状をみるにつけ、捉えようとしている概念がそもそものようなものであるのかに関する理論的検討を厳密に行っていく必要性を感じざるを得ない。

桑原 (PC008) は、青年期における自責感についての概念的検討を、大学生を対象とした自由記述式の調査を用いて行っている。自責感、罪悪感、自己嫌悪感という 3 つの概念についてのイメージを記述してもらい、収集された記述を KJ 法により分類し、3 つの概念相互の重なりやズレを検討することにより、自責感という概念の特徴を明確化しようと試みている。この類の基本的な研究

がもっと行われるべきであると考えているが、人格構造を捉えるのに有効な概念を設定し、その概念を明確化しようという場合の方法論の整備が必要である。桑原の研究では、大学生 22 名の回答をもとに 3 つの概念の整理を行っているのであるが、それを「青年期」という制約をつけたとして、どこまで一般化してよいのかという問題がある。特定の概念についての理論的検討を行う際に、伝統的な辞書的意味や哲学的考察を基準に据える場合と大学生など一般の人々の回答を基準にする場合がある。多くの因子分析的研究にも通じることだが、問題とされる概念に関して普段ほとんど意識することもない一般の人々の、しかも特定の層の回答をもとに概念の規定を行うことは妥当なのだろうか。ただし、青年期あるいは中年期といった特定の層のあるイメージ構造を捉えたいというような場合には、そうした特定の層の回答をもとにすることが必要なのはいうまでもない。このような方法論をめぐる議論を十分に行っていくことが望まれる。

2. 人格の構造や機能を捉える尺度や検査法、実験法の検討

人格の構造や機能を捉えようという研究で最も多いのが測定尺度に関する研究である。

上地・宮下 (2005) は、Kohut の理論をもとに自己愛的脆弱性尺度を作成し、その信頼性および妥当性の検討を行っている。上地らは、自己愛的障害の本質を心理的安定や自己評価を維持する心理的機能の脆弱性に求める Kohut 理論に基づいて、これまでに行われた実証的研究の成果を整理することにより、自己愛的脆弱性という観点から自己愛を測定する際に重要となる 5 つの指標 (他者からの承認・賞賛への過敏さ、潜在的特権意識とそれによる傷つき、恥傾向と自己顕示の抑制、自己緩和能力の不全、目的感の希薄さ) を抽出した。これらを表す項目で構成した尺度項目を因子分析をもとに精選し、信頼性・妥当性の検討を経て、これら 5 因子からなる尺度が作成された。

阿部・今野 (2005) は、Rosenberg の自尊感情尺度をもとに教示文と項目文の語尾を変えることで状態自尊感情尺度を作成し、その信頼性および妥当性の検討を行っている。その結果、信頼性は確認されたが、状態自尊感情

であるにもかかわらず状態不安だけでなく特性不安との関連もみられるなど妥当性に関しては十分な保証が得られていない。この研究の中で、最近1週間の受容経験を尋ねて状態自尊感情および特性自尊感情との関係を検討した結果、双方において正の関係がみられた。状態自尊感情ばかりでなく特性自尊感情までが最近の受容経験と関係することの説明として、特性自尊感情は出来事や経験から影響を受け変動しうることが根拠としてあげられている。では、特性自尊感情と状態自尊感情の違いはどこにあるのだろうか。

一般に自尊感情と呼ばれ Rosenberg に代表される尺度により捉えられてきた人格特性としての自尊感情を特性自尊感情と呼び、それとは区別されるものとして日々の経験に応じて変動する自尊感情を状態自尊感情と呼び、自尊感情を2種類に区別することに対しては、Brown and Dutton (1995) のように反対の立場をとる者もある(榎本, 1998)。James (1892) は自尊感情の問題を自己評価の感情として取り上げ、自己に対する評価には自己に対する満足や不満の客観的理由とは無関係の、ある平均した調子の自己感情があるとしている。Rosenberg (1965) は、自尊感情を自己に対する肯定的または否定的な態度であると定義づけている。そのときどきの状況とは無関係の平均した調子にしても態度にしても、比較的安定した性質を指すものと考えてよいであろう。

これらをふまえて榎本 (1998) は、自己に関する記述的側面が自己概念であり、そのような記述的側面に対して評価的色彩を帯びたものが自己評価と自尊感情であるとした上で、自己に関する個々の記述的側面に対する具体的な評価が自己評価であり、多くの自己評価的経験の積み重ねを通して形成された自己評価的な感情複合体が自尊感情であると定義づけている。そのように自尊感情を人格の比較的安定した特性とみなすなら、特性的なもののみが自尊感情であり、そのときどきの状況に応じて一喜一憂するのに伴い一時的に上昇したり下降したりする自己に対する価値感情をわざわざ別種の自尊感情として設定する必要はないということになる。従来の自尊感情の捉え方に対して、新たにそのときどきの状況に応じて変動する状態の自尊感情という概念を導入するとすれば、それを自尊感情という用語のもとに導入する必要性和意義についての議論が十分行われる必要があるであろう。

その他にも人格のさまざまな側面を捉える尺度の開発が目指されている。

谷 (仙谷)・山崎 (2004) は、児童の心身の健康問題や行動上の問題との関連が数多く報告されている統制の位置に着目し、児童用の外的統制性質問紙を開発して、その信頼性および妥当性を検証している。小堀・丹野 (2004)

は、完全主義の認知について、自己志向の完全主義がセルフ・スキーマとして活性化した結果、意識化された思考であり、出来事の解釈や注意に影響を与えるものと定義し、その認知を多次元的に測定する尺度を開発し、信頼性および妥当性を検証している。内藤・鈴木・坂元 (2004) は、人は誰も合理的処理および直観的処理という2つの情報処理様式をもつとする認知的経験的自己理論のもとに情報処理スタイル (合理性・直観性) 尺度を開発し、その信頼性および妥当性を検証している。勝谷 (2004) は、抑うつの発生・持続や対人関係の悪化をはじめとする精神的な不健康との関連が指摘されている再確認傾向に着目し、重要他者に対する再確認傾向尺度を改訂し、その信頼性および妥当性を検証している。

関口 (PD100) は、自己確認、勝ちへの執着、自己アピール、向上心の4因子からなる競争心尺度を試作している。豊田・清水・森田 (PC032, PC033) は、情緒的知能を測定する尺度 ESCQ の日本版を作成して、仮説通り感情の表現と命名、感情の認識と理解、感情の制御と調節の3因子構造を確認している。李 (PC030) は、Bowlby の愛着理論に基づいて、青年期の母親に対する愛着を測定する尺度を作成し、3因子構造を報告している。菰田 (PB006) は、職業意識の成熟度を捉える職業レディネス尺度を作成し、見通し、現実性、客観性、主体性の4因子を抽出している。横山・東條 (PF076) は、自傷行為への心的傾斜を捉えるものとして、自傷行為親和性尺度を作成し、情緒的傾斜、自傷化的習癖、威圧的母亲観、神経性習癖の4因子を抽出している。伊藤 (PC094) は、達成行動の背後にある動機の一つ、他人のためという他者志向的動機の概念的妥当性の検討をしている。西田・足立 (PC087) は既存の思いやり尺度の因子構造を再検討し、尺度作成者による報告とは異なる因子構造を確認している。

先にも指摘したように、最近の研究動向をみると尺度が乱立気味であり、安易に尺度作成に走ることなく、その前提となる概念の十分な検討を行うことが大切であろう。特定の人格概念の構造を因子分析に代表される統計的処理の結果に基づいて論じる傾向が強いが、いうまでもなく統計的処理の結果はどのような概念構造を想定しどのような項目を用意するかに規定されている。項目の選定が仮説に依存しているのであるから、そうした項目に統計的な処理を加えた結果からのみ概念構造を検証するやり方は十分な説得力をもちえない。そもそも仮説が想定していない心理傾向を表す項目は尺度中に含まれていないのである。ゆえに、統計的処理に頼りすぎることなく、仮説立案時に十分に理論的検討を行っておくことが重要なのである。

尺度以外の人格検査法としては、投影法や作業検査法

があるが、人格領域における研究のほとんどが尺度を用いたものであった。投影法は臨床領域でよく用いられるものであり、研究としても臨床領域に多くみられるものと思われる。

実験的方法として、戸田・川村 (PC035) の察しの個人差を実験的に捉えようとの試みがある。戸田らは、最近の若者の気遣いや思いやりのなさが指摘されることに関連して、察しの悪さは他者という刺激に対して注意を向けない傾向に関係していると考え、人物、もの、視線・表情、場・状況などの情報への注意の向け方と察しの良さ・悪さとの関係を検討している。その結果、情報への注意の仕方と察しとの間には直接関連がみられなかったが、視線・表情やものへの注意度と社会的スキルとの間に有意な正の関連がみられた。

尺度による人格の測定はほとんどが本人の内省に基づいた自己報告式のものである。集団を対象として大量のデータを一挙に収集できるという便利さゆえに、尺度法が全盛であるが、本人の内省によらない実験的方法の利点もあり、もっと多くの実験的研究があってもよいように思われる。その際に、尺度研究における項目設定と同様、どのような行動 (反応) に着目し、それをどう意味づけるかが決め手となる。そこでも概念規定を厳密に行うことが重要であると同時に、概念とその具体的現れとみなすことのできる行動を結ぶ仮説の理論的検討が十分になされることが大切なのはいうまでもない。

3. 人格の構造や機能を表す特定の変数 (概念や尺度)

と他の諸変数との関連

人格の構造や機能を表す変数同士の関連を検討する研究としては、自己関連尺度を用いたものが多くみられる。

自分自身に完全を求める自己志向的完全主義には抑うつ傾向や絶望感などの精神的健康と正または負の関連をもつ2つの側面がある可能性を示唆する結果をもとに、大谷 (2004) は、自己志向的完全主義を目標として完全を求める側面と不完全を受容できない側面の2つに分け、自己評価的抑うつとの関連を検討している。その結果、自己志向的完全主義には高目標設定、失敗過敏、行動疑念などの潜在変数があり、高目標設定は自己評価的抑うつに負の影響を与え、失敗過敏および行動疑念は自己評価的抑うつに正の影響を与えることを見出している。このように自己志向的完全主義には、自己評価的抑うつなどの精神的健康を表す変数に正の影響を与える側面と負の影響を与える側面という2つの側面があることが確認された。

自己愛に関してもいくつかの研究がみられる。自己愛については、Gabbard が自己誇大感があり他者の反応を気にしない無関心型と他者の反応に過敏で傷つきやすい

過敏型という両極を指摘して以来、この2つのタイプに大別する捉え方が広く踏襲されている。

中山 (PC016) は、自己愛と自我同一性の関連を検討している。2種類の自己愛を測定する評価過敏性尺度および誇大性尺度と多次元自我同一性尺度 (谷, 2001) との関連を検討した結果、評価過敏性は同一性の感覚と負の関連、誇大性は同一性と正の関連を示すことが見出された。さらに、同一性各側面との関連の検討の結果、評価過敏性は心理社会的同一性、連続性、対他的同一性、対自的同一性と負の関連があり、誇大性は心理社会的同一性、対自的同一性、連続性と正の関連があることが示された。ここから、自己愛には自分としてのまとまりを促進・強化する側面と阻害する側面があること、あるいは自分としてのまとまりがあることの現れとみなしうる側面と自分が拡散していることの現れとみなしうる側面があるといえるであろう。

小塩 (PC018) は、自己愛的な人物はクラスメイトから好意をもたれ友人も多いと評価されるが必ずしも信頼はされていないという自身の先行研究をふまえて、自己評価と他者評価の比較といった観点からの再検討を行っている。その結果、自己愛的な者は他者に対して友好的で誠実であると自己評価しているが、他者からは友好的と評価されても誠実とは評価されていないことが示された。このことは、自己愛のもつ自己誇大感のような自己認知の歪みが、自他の関係の認知の歪曲を生み、実際の人間関係上の不適応につながりやすいといった流れを示唆するものといえる。ただし、上述の上地・宮下 (2005) のいう自己愛の脆弱的側面に着目した場合には、他者による評価への過敏さや不安が自己認知や自他の関係の認知を実際より負の方向に歪め、引きこもり傾向などの人間関係上の不適応につながるといったまったく別の形の流れも想定しうる。ここでも、自己愛という概念の理論的検討のあり方が重要な意味をもち、尺度の構成の仕方により結果が大きく方向づけられるといった問題に行き着く。同じ用語を用いながら想定されている概念構造が異なっているというのは、心理学研究の現状においては日常茶飯事である。そうした混乱を避けるためにも、尺度の乱立を避け、統一的尺度を用いたり、併存する尺度それぞれの概念規定等の前提条件を明示したりすることによって、得られた知見の孤立化を防ぐことが求められる。

玉瀬・相原 (PC005) は、土居の甘え理論を検証しようと甘え希求、甘え受容、甘え歪曲、甘え拒絶の4因子からなる甘え尺度を作成し、これらと自己愛や思いやりとの関連を検討している。その結果、甘え希求や甘え受容といった相互依存的甘えは思いやりを説明する要因であり、甘え歪曲や甘え拒絶といった屈折した甘えは自己愛

的傾向を説明する要因であることが示唆された。

岡田 (2005) は、大学生を対象に共感性と自己概念の関係を検討している。その結果、両者の間に直接的な関連はみられなかったが、クラスター分析により感情的共感性が低い群では自分自身の理想像について心理的特性に注目した判断よりも身体的側面に注目した判断をしていることが示された。

人格というのは単純に捉えうるものではない。当然のことながら多面的に捉える必要がある。ある時点において人格の特定の側面を表すと思われた概念 (変数) が、さらなる下位概念に細分化して捉えられるべきであることが判明したり、別々の概念に分解されるべきであることが判明したり、他の複数の概念の単なる交わりの部分にみられる性質にすぎないことが判明したりといったことが十分起こりうる。したがって、他の諸変数との関連を検討する研究の中で思いがけない発見がもたらされる可能性がある。だが、個々の概念間の関連が断片的に報告されても、それらを有機的に結びつけることができなければ、せっかくの知見が埋もれてしまう。ゆえに、個々の概念間の関連を検討する際には、検討すべき概念や尺度を選び出す前提となり、さらに結果を意味づける文脈となる理論面の考察を十分行っているはずであり、その部分を前面に出すことが求められる。

II. 人格の発達および変容

1. 人格の (特定の側面の) 発達および変容の実態把握

人格の特定の側面の発達および変容を捉えようといった実態把握の研究は、この1年をみるとあまり報告がみられない。

川崎・河村 (PA068) は、小学校4年生から6年生を対象に、自己表出の仕方の発達を横断的に検討し、自己開示的表出には学年差がないけれども、自己呈示的表出は4年生より5・6年生の方がよく行っていることを見出している。ここでいう自己呈示的表出とは、学校で嫌なことがあってもその嫌悪感をそのまま表出せずに明るく見せる行動を指しており、小学校の中学年より高学年の方がそのような自己コントロールができるようになることを示す結果といえるであろう。川崎らは、このような結果を嫌悪感が生じてそれを表出できない児童の心の問題や友人関係のあり方の問題に関係づけている。そのように自己呈示的表出のストレスを溜め込む側面に着目することもできるが、成熟の微すなわち友人関係をよくするスキルの発達といった側面に注目することもできるであろう。仮説と結果をつなぐ変数が無数にありうるところに人格発達に関する研究の難しさがある。

発達的变化の実態を捉えるには縦断的研究が欠かせな

い。城 (PB017) は、高校1年生時にキャリア発達に関する自己効力感を測定し、2年生時および3年生時にも追跡調査を行い、自己効力感の変化を検討している。最も変化が大きかったのは、自己理解・自己評価についての自己効力感であり、学年とともに強まっていた。ついで変化が大きかったのが目標設定および問題解決についての自己効力感で、これらも学年とともに強まっていた。さらに、意思決定、自己開発などの自己効力感も学年とともに強まっており、ネットワークについての自己効力感以外は学年とともに強まっていくことが示された。

藤崎 (PA087) は、Harter らによる児童用・思春期用・青年用のコンピテンス尺度を用いて小学校6年生時、中学校2年生時、3年後の高校生時、さらに3年後の大学生時にコンピテンスの測定を行い、コンピテンスは青年期前・中期に低下し、青年後期に再び上昇することを見出している。

山岸 (PB075) は、看護短大在学時と卒業後10年を経た11年後の時点で、内的作業モデルで捉えた対人的枠組みや人生の各時期を振り返っての適応感の測定を行い、発達の変化の検討を行った。その結果、対人的枠組みはアンビヴァレント尺度においてのみ有意差がみられ、成人期になると自他の関係に関する不安定さは減少することが示された。さらに、短大時代の適応感に関する印象は在学時と卒業後10年時の相関がないことがわかった。その最中と後で振り返ったときとでは適応の印象がかなり異なることを示す結果といえる。

2. 人格の発達および変容をもたらし要因

人格の発達を捉えるにはさまざまな切り口があり、その切り口を表す多くの概念が提唱され、それらを用いて発達の変化を捉える試みがなされているのは前項でみたとおりである。では、ある概念で表される人格的特徴がどのようにしてもたらされるのか、またそれは年齢の上昇とともにどのように変化していくのだろうか。ここで問題となるのは、人格の発達あるいは変容をもたらし要因は何かということである。

岡田 (PC027) は、高校生および大学生を対象に、友人関係のあり方が自己の発達をどのように規定するかを検討している。そこでは、現代の青年に特有な友人関係を特徴づける自己閉鎖、軽躁的關係、他者への侵入回避、傷つけられることの回避の4つの変数により友人関係のあり方を捉え、公的自己意識、私的自己意識、視点取得 (共感性)、やさしさ、まじめさにより自己の属性を捉えている。結果として、自己閉鎖や傷つけられることの回避が公的自己意識に影響し、私的自己意識が視点取得に影響することが示された。また、軽躁的關係は大学生においてのみ公的自己意識に関係し、公的自己意識は高校生

においてのみやさしさに関係するというように、年代による違いもみられた。

佐藤 (PA095) は、他者との暖かい交流と自己効力感との関連を検討し、男子学生において友だちによるサポートと自己効力感との間に有意な相関があることを見出している。すなわち、とくに男子学生においてのみ友だちとの暖かい交流が自己効力感の高さにつながることが示唆された。

眞榮城 (PC017) は、中学生を対象に、過去1年間に体験したライフイベントと自己評価との関連を検討している。その結果、成績が上昇したというライフイベントを経験している群は経験していない群よりも学業能力評価・容姿評価・自己受容感が高いこと、学校でいじめを経験した群は友人関係評価・自己受容感が低いことが示された。そこから、中学生の自己評価の高低には友人関係や学業成績が影響していることが実証されたと結論づけている。

人格の発達に影響する要因として従来から多くの研究において取り上げられてきたのが親の養育態度である。竹嶋・戸田・青木・谷口 (PB013) は、近年の社会的スキルの乏しさによると思われる問題との関連で、父親の養育態度と子どもの生活充実感や社会的スキルの関係についての検討を行っている。養育態度としては、拒否的態度と過保護的態度が測定された。その結果、女子では父親の拒否が生活充実感に負の影響を与えること、男子では父親の過保護が生活充実感に正の影響を与えることが示された。社会的スキルとの関係では、女子では父親の拒否が関係維持行動に負の影響を与え、関係向上行動に正の影響を与えることが示された。このことは、女子においては父親の拒否的養育態度が社会的スキルのある一面を促進する場合があることを意味する。

親になるという要因が人格発達に与える影響もある。後藤・井上・後藤 (PB092) は、親としての発達の自己認知尺度 (柏木・若松, 1994) を用い、母親としての発達の自己認知に影響する要因を検討している。その結果、親発達の5つの因子のうち、自己の強さに対しては子どもへの愛着意識・夫婦関係満足度・子どもの年齢が正の影響を及ぼし、柔軟さ・前向きに対しては夫婦共感性が正の影響を及ぼし、視野の広がり・伝統の受容に対しては子どもへの愛着意識・夫婦共感性が正の影響を及ぼし、他者受容に対しては子どもへの愛着意識・パートナーへの愛着意識が正の影響、パートナーに対する愛着要求が負の影響を及ぼし、生きがいに対しては子どもへの愛着意識・夫婦共感性が正の影響を及ぼすことが示された。このように、親になることによって、子どもへの愛着意識をもつことがとくに親発達の自己認知を高めることが明

らかとなった。後藤・井上・後藤 (PB093) は、父親としての発達の自己認知に影響する要因に関しても同様の検討を行っている。

3. とくに自己のアイデンティティの発達および変容の検討

人格発達の一つの鍵を握ると考えられるのが自己のアイデンティティの発達である。エリクソンがアイデンティティの確立を青年期の課題とみなしたように、アイデンティティの形成あるいは発達に関する研究には青年期を対象としたものが圧倒的に多いというのが現状である。

アイデンティティ研究でよく用いられるのが Marcia らが提唱したアイデンティティ・ステータスの類型あるいはそれをもとにした尺度である。川俣・河村 (PB018) は、友人関係のあり方によってアイデンティティ・ステータスがどのように違っているかを検討している。ここでは、アイデンティティを加藤 (1983) により現在の自己投入、過去における危機、将来の自己投入という3つの下位尺度によって捉えようと試みている。その結果、男子では、内面的で気遣いをしない関わりをもつ者の方が、その他の関わりをもつ者より現在の自己投入得点が高いことが示された。女子では、内面的で気遣いをしない者、互いに気遣いをしながら内面的な関わりをもつ者の方が、表面的な関係をもつ者よりも現在の自己投入得点が高いことが示された。

アイデンティティの発達は時間的展望に深く関わっている。金子 (PB015) は、大学生を対象に、内的統制、過去受容、曖昧さ耐性などが時間的展望をどのように規定するかを検討している。その結果、過去を肯定的に受けとめるが過去についてこだわりをもつ者が明るい将来展望をもつ傾向があること、さらに努力を大切に感じ曖昧さを嫌わない者が明るい将来展望をもつ傾向があることが示唆された。

落合・本多・藤井・落合 (PB020) は、看護職を目指す学生を対象に、職業的モデルをもつことが職業的アイデンティティや自己効力感にどのような影響を与えるかを検討している。その結果、職業的モデルをもつ学生の方が職業的アイデンティティ得点が高く、自己効力感の下位尺度のうち行動の積極性得点が高いことが示された。ここからいえるのは、身近な職業的モデルの存在が職業的アイデンティティの形成を促進するということである。親の働く姿を身近に見ることが少なく、職業も多様化している今日、さまざまな職業的モデルを具体的につかむことが個人にとっての大きな課題となっており、そのための教育的働きかけのあり方を検討する必要があることを示唆するものといえる。

アイデンティティ研究の多くは青年を対象としたものであるが、アイデンティティのあり方が問われるのは青年期に限らない。成人期のアイデンティティの発達に関しても多くのデータが蓄積されつつある (Kroger, 2000)。長寿化により中年期が人生の折り返し点とみなされるようになるとともに、社会的役割に大きな変化が生じ、人生の後半に向けて生活構造の組み替えが必要となる中年期にもアイデンティティの混乱が生じ、アイデンティティをめぐる問いが活性化されると考えられる。清水 (2004) は、中年期の女性を対象に、子の巣立ちと母親のアイデンティティ・ステータスの関連を検討している。その結果、わが子の巣立ちを強く認識している母親ほど、アイデンティティ達成やA-F中間など高いステータスの出現率が高いことが示された。さらに、フルタイム就業の母親では子の巣立ちがアイデンティティ達成につながっているのに対して専業主婦では逆にアイデンティティ拡散につながっていること、母親であることによる充実感や成長感を感じるなど母親役割を積極的・肯定的に受容している母親ほどアイデンティティ拡散的でないこと、子どもに対して密着・献身的態度をもつ母親ほどアイデンティティ拡散的であること、相談できる友人がいる母親ほどアイデンティティ拡散が少ないことなどが確認された。

4. とくに自己のアイデンティティの発達および変容の質的な把握

自己のアイデンティティをめぐる問いがどのような形で、いつ頃から意識されるようになるのか、どのような時期に、あるいはどんなことがきっかけで活性化されるのか、それはどんな意味をもつのかといったテーマは、自己の発達研究の根幹をなすものといってよいであろう。前項でも自己のアイデンティティに関する研究を取り上げたが、ここではとくに質的な研究を取り上げることにはしたい。

天谷 (2004) は、「私はなぜ私なのか」「私はなぜ他の時代ではなく、この特定の時代に生まれたのか」といった問いを自我体験とし、中学生から大学生を対象に、質問紙に自由記述を加えた調査を実施し、自我体験がどれくらいの割合で、いつ頃からみられるのか、そのような体験に意味があったと思うかどうか、他者に開示したかなどを調べている。その結果、自我体験は半数弱が体験しており、概ね年齢とともに体験率は増加するが、すべての人にみられるわけではなく、自我体験しやすい人とそうでない人がいることが示された。自我体験の初発年齢は、小学校高学年を中心とした子ども時代にやや多く、自身の自我体験に意味を見出している人よりも意味づけを積極的にしていない人の方が多いことが示された。著

者自身も述べているように、ここでは自我体験の様相を量的に捉えることを目的としている。非常に興味深い試みであるが、ここでいう自我体験のような現象は、質的側面を捉えることにより、その独自の様相に迫れるものであり、こういったテーマに関する質的研究の推進も望まれる。

井伊 (PB012) は、前項で言及した大学生に対するキャリア意識の発達の促進に関連して、キャリア教育には自己を捉え直し再構築する能力の育成が含まれるとし、日頃何気なく行っている自問自答のもつ意味について面接内容をもとにした検討を行っている。そこで行われた半構造化面接では、自問自答体験の時期、きっかけ、答を出すために何か行動をしたか、答は出たか、答あるいは自分の取り組みについての満足度・納得度といった5つの質問に対する回答を求めている。回答を検討した結果、問いに対して答を出すために何らかの行動を行った自問自答の方が、たとえ明確な答が出ていなくても問いに対する自分の取り組みへの満足度・納得度の高さにつながるという傾向がみられた。また、不安な気持ちが自問自答を促し、自問自答に取り組むことが不安な気持ちを軽減しているという働きがみられたとしている。

小沢 (PB064) は、アイデンティティ概念を現象学的方法によって解きほぐす試みにおいて、アイデンティティ危機において失われているのは、生きている自分を納得して受け入れるために必要な日常生活の中での居場所であり、その居場所に付随する、こうして生きている自分を納得して受け入れるための価値基準であるとしている。そこでは、意識の底にあるものを問いかけると、これまで生きてきた居場所や価値基準は失っても、この自分の人生を納得したものになりたいという根元的な思いに行き着くという。そのような思いを起点として、これまで生きてきた居場所および価値基準という自分の人生の軌跡の経緯を見つめ、日常生活の中で新たな居場所および価値基準を探し獲得していくことがアイデンティティを得ることであるという。

榎本 (2004) は、自己のアイデンティティは自己物語として保持されとする立場から、自己の妥当化のためには現在の自己のあり方とそこに至る経緯をうまく説明する物語すなわち自己物語を明確化し、かつ肯定的なものとする必要があるとする。そこで行われるのは、因果の連関をつけつつ時間的流れの中に各エピソードを位置づけ、現在の自己を明確に定位することであり、これを自己物語化と定義づけている。

榎本 (PB074) は、半構造化面接による語りデータをもとに、自己物語化のメカニズムについての検討を行っている。そこでは、親をはじめとする上の世代から自分へ

と至る因果の流れをつくることにより個人を超えた時間の流れの中に自己を定位する手法が多く用いられることを指摘するとともに、自己物語化のメカニズムについて肯定性(否定性)、能動性(受動性)、統合性(拡散性)という3つの観点から、典型的にみられる自己物語化のパターンを類型化している。肯定的なエピソードをもとにした自己物語化と否定的なエピソードをもとにした自己物語化に分け、研究者による客観的視点よりも当人の内的枠組みを重視するという立場から、前者を「お陰様」的自己物語化(肯+能+統+)、「さすが自分」的自己物語化(肯+能+統+)、「あんな時もあった」的自己物語化(肯+能-統-)の3つに類型化し、後者を「あれがあったから」的自己物語化(肯+能+統+)、「なんでこんな目に」的自己物語化(肯-能+統-)、「どうせ自分は」的自己物語化(肯-能-統-)の3つに類型化している。

中島(PF092)は、非行少女が自己の生育歴について語った自己物語から他者に対する感情を抽出し、感情の肯定性・否定性をもとに分類している。その際、家庭、学校、その他の対人場面、問題行動場面の4つの場面に分け、各場面における感情の肯定性・否定性の比率を検討している。ある少女の自己物語においては、家庭と学校で出会う他者には否定的・拒否的な感情をもつ割合が高く、とくに学校でその傾向が著しく、問題行動場面での他者には両価的であるがやや肯定的・受容的な感情をもつ割合が非常に高いことが示された。

家島(PC021)は、大学生・大学院生を対象として、理想自己像に影響を与えた人物について尋ねる面接調査を行っている。理想自己像と人物モデルに関する語りをもとに3種類の関係性および4種類の意味づけが抽出された。これらをもとに、影響プロセスの検討を行い、好ましい他者であり自己との類似・異質(親近感+尊敬)を特徴とする接近対象(模範モデル)、類似のみ(共感)を特徴とする親和対象(自己肯定モデル)、異質のみ(尊敬)を対象とする空想願望(補償モデル)、好ましくない対象である回避対象(反面教師モデル)といった類型化を行っている。

田沼(PA107)・栗山(PC006)・広瀬(PC007)・柳田(PC037)の発表は、一連の伝記分析となっている。田沼は、マイルス・デイヴィスの創造的人生を変化への希求として特徴づけ、その背後にある要因を意志力・主導性・カウンターアイデンティティの3つの観点から検討している。栗山は、ピカソの制作活動のエネルギー源を変革者としてのアイデンティティに求め、ユング心理学のアニマ・アニムスという概念を用いて、その統合過程における変革者としてのアイデンティティ形成についての検討を行っている。広瀬は、シュヴァイツァーの実践家としてのアイデンティティ形成を葛藤経験や価値構成プロセス

といった観点から検討している。柳田は、フロムの愛する能力という観点およびエリクソンの親密性および生殖性の獲得といった観点から、オードリー・ヘップバーンの愛する能力の発達についての検討を行っている。

ここで取り上げた質的研究の成果を評価するにあたっては、評価の軸をどのように設定するかに迷いを感じざるを得ない。その大きな理由には、質的研究の評価方法がまだ確立されていないことがあるが、スペースの問題もある。具体的な語りを通して何らかの知見を見出した場合に、それを読者に共有してもらうためには、語りの場や語りの流れの追体験が可能になる程度の分量の語りデータやそれを意味づける際に用いた視点を提示することが不可欠である。質的研究の成果を現在のような学会発表論文のスペースで説得力をもって説明するのは至難の業であり、個々の研究発表に対してもっと多くのスペースを提供する必要があるのではないだろうか。量的研究の場合は標準化された手法が用いられるため、分析過程の説明は大幅に圧縮することができる。しかし、質的研究の場合は、分析過程をある程度具体的に提示しない限り、その妥当性を評価するのが困難であり、あまりに圧縮するとせっかく丹念に行われた研究の説得力を奪ってしまうことになりかねない。

III. 人格の適応・健康

1. 不適応行動に関連する人格の要素および機能

抑うつ傾向を示しやすい人格が増加しているのか、不適応的人格についての研究には、抑うつに関するものが目立つ。伊藤・竹中・上里(2005)は、抑うつの代表的な心理的要因とされる完全主義、執着傾向、そして抑うつスキーマの一つである非機能的態度を取り上げ、それら3つの性質にはネガティブな反すうが共通要素として存在し、それが抑うつを引き起こすという仮説のもとに、ネガティブな反すうの存在と機能についての検討を行っている。その結果、完全主義、執着傾向、非機能的態度という3つの抑うつ要因のいずれもがネガティブな反すうと正の相関関係にあること、およびネガティブな反すうが高いとうつ状態が引き起こされやすいことが示された。

抑うつスキーマ(非機能的態度)が抑うつの原因であるとする仮説を支持する研究が多くみられる一方で、抑うつスキーマは抑うつに依存して変化する、つまり抑うつスキーマは抑うつの先行因子ではなく抑うつの一部であるとする研究報告もみられることから、最近では両者の間に双方向の因果関係があるとする研究報告もみられるようになった。それをふまえて、家接・小玉・田上(2004)は、抑うつスキーマと抑うつとの間に双方向の因果関係が

あるかどうかを検討している。結果として、双方向の因果関係の存在を見出している。

黒田・桜井 (PB062) は、他者からの肯定的な評価を求めて否定的な評価を避けようとする評価目標が抑うつの発生に重要な役割を果たすという、動機づけに抑うつの素因を求めるモデルを支持する立場から、評価目標の発達メカニズムについての検討を行っている。その結果、母親の養育態度の方が父親の養育態度より子どもの脆弱な自己発達と関係していること、とくに母親の過剰な期待と首尾一貫しない養育行動は条件付きの自己価値や不確かな自己概念のような脆い自己概念と関係することが示された。そして、母親の過剰な期待が条件付きの自己価値をもたらす、それが評価目標の形成につながるというパスが検証されている。

小林・桜井 (PC029) は、防衛的悲観主義の生起プロセスについての検討を行い、回避目標を抱くことは悲観的な心理状況を促進し、接近目標および熟達目標を抱くことは熟慮を促し学習行動を促進するという結果を得ている。ただし、熟慮が学習行動を促進することは示されたが、悲観による学習行動への影響は示されなかった。防衛的悲観主義という概念に関しては、その生起プロセスに加えて、それがもたらす効果、すなわち防衛的悲観主義の機能についても明確化していくことが、その概念を導入することの必要性のアピールにつながるであろう。

ニートやフリーター、早期離職者の問題が深刻化しつつある今日、若者の不適応行動の代表的なものとして職業選択回避がある。職業選択を困難にしている人格要因を探り出し、対応を考えることは現実的要請がきわめて強いテーマであると思われる。これに関連する研究はまだ少ないが、田澤 (PB052) は、過度に自己実現を重視することが職業不決断と関連するのではないかとこの観点に立ち、大学生の職業不決断と関連する人格要因を順応性や自己実現志向といった側面から検討している。そこでは、職業不決断は、情報・自信不足、モラトリウム、相談希求、希望関連不安、葛藤の5因子で捉えられている。その結果、順応性が低い者は順応性が高い者より情報・自信不足得点が高いことが示された。また、順応性が低くて自己実現を重視する者は希望関連不安得点が高く、順応性が低くて自己実現を重視しない者はモラトリウム得点が高かった。ここから進路選択にあたっては順応性をもつことが大切であることがわかる。だが、進路選択にはさまざまな人格的要因が複合的に作用していると考えられ、今後多様な視点からの検討がなされることが望まれる。

2. 人格の適応性・健康性につながる要因

人格の適応性あるいは健康性の指標としてよく用いら

れるのは自尊感情である。自己関連の概念のうち研究論文において最もよく用いられているキーワードは自尊感情であるが(榎本, 2000), それには Rosenberg の自尊感情尺度がわずか10項目からなり比較尺度として用いるのに便利であるといった事情も関係していると考えられる。人格の適応性・健康性の指標として用いられる際には、自尊感情得点が高いことが適応・健康の徴であるとの暗黙の前提があるが、自尊感情の概念自体実はそれほど単純な扱いが許されるものではない。先に、特性的自尊感情と状態的自尊感情に分けることの是非に触れたが、そのほかにも意識化された自尊感情と意識化されていない自尊感情を区別する立場 (Pelham, Hetts, & Kuwano, 1995), 条件付きの自尊感情と真性の自尊感情に区別する立場 (Deci & Ryan, 1995), 個人的自尊感情と集合的自尊感情に区別する立場 (Crocker & Luhtanen, 1990) などがある。日本文化のもとでは、自尊感情尺度の自己肯定的項目が自分に「あてはまらない」と答える者が本当に自尊感情が低いのかといった問題もある。自尊感情をキーワードとする研究論文は多いものの、単にその尺度を用いたという程度のことが多く、自尊感情の概念そのものを検討した研究は意外に少ない(榎本・稲本・松田・梅垣, 2001)。したがって、尺度を用いることで自尊感情を安易に操作的に用いるだけでなく、尺度構成の前提となる自尊感情そのものの厳密な検討が必要である。

伊藤・小玉 (2005) は、そうした自尊感情には適応的な側面と不適応的な側面があり、Rosenberg の自尊感情尺度は適応的側面と不適応的側面を弁別できず、その適応的側面に相当するものが authenticity であるとする Kernis の指摘に着目し、それを自分らしくある感覚すなわち本来感と訳して、本来感尺度を作成してその信頼性および妥当性を確認するとともに、本来感と自尊感情の違いを検討している。その結果、本来感も自尊感情ともに主観的幸福感や心理的ウェルビーイングを促進するが、ウェルビーイングの下位因子別に検討したところ、抑うつと人生における目的には本来感と自尊感情の双方が、不安、人格的成長、積極的な他者関係には本来感のみが、人生に対する満足には自尊感情のみが促進的に作用することが示された。こうした結果は、自尊感情に部分的に重なる本来感という新たな概念の有効性を示唆するものであると同時に、自尊感情という概念の再考を促すものともなっている。

人格の健康性と関連すると考えられているものに、対人関係のあり方を規定する内的作業モデルがある。Bowlby の愛着理論によれば、乳幼児期における愛着対象との相互作用を通して内的表象すなわち内的作業モデルが構成され、それに基づいて対人行動がとられるよう

になるものであり、そうして出来上がった対人的枠組みは生涯にわたって用いられる。したがって、乳幼児期に養育者との間に安定した愛着関係を築くことが大切であり、それによって青年期や成人期の対人関係のあり方が規定されると考えられる。そのことを検証するために、乳幼児期の親子間の愛着関係と青年期や成人期の対人的枠組みの関連を検討する研究が行われてきた。だが、青年や成人のもつ対人的枠組みとその時点において測定された乳幼児期の愛着関係との間に関連がみられたとしても、後者が前者を規定しているという保証はない。現在安定した対人的枠組みをもつがゆえに過去の愛着関係の振り返り方が肯定的・安定的なものになっている可能性も拭えない。

このような問題に関連して山岸 (2004) は、女子短大生を対象に、現在の対人的枠組みのあり方と過去の対人的経験の捉え方との関連を検討している。現在の対人的枠組みも過去の対人的経験も、愛着関係が安定・アンビバレント・回避のいずれであるかといった観点からの評定がなされた。結果として、現在の対人関係に関する3つの枠組みのうち、安定的枠組みは生育史にみられる母親や友人との安定愛着と正の、回避関係と負の関係にあり、回避的枠組みは母親や友人との回避関係と正の、友人との安定愛着と負の関係にあったが、不安枠組みではあまり関係はみられなかった。また、現在の対人的枠組みと自らの生育史についての語りの関連は、現在の枠組みの安定性が低い群における方が強く、とくに回避群の語りには問題があるものが多くみられた。このような結果から、現在の対人的枠組みの安定性が低い者は生育史上の対人的経験を否定的に捉える傾向があるとされた。だが、そのような傾向が、現在の対人的枠組みによって過去の対人的経験の再構成の仕方が影響された結果もたらされたのか、それとも過去の対人的経験のあり方が現在の対人的枠組みの形成を規定してきた結果もたらされたのかはわからない。そのあたりを明確にするには、山岸も指摘するように、縦断的方法を用いるなどの工夫が必要となる。

成人においても安定した愛着関係をもつことが個人のウェルビーイングや対人関係上の満足感を促進するといった知見をもとに、田中 (PB066) は、大学生を対象に、母親・父親・親友・恋人という4種類の対象との間の愛着の安定度とウェルビーイングの関連を検討している。その結果、母親との安定した愛着は人生に対する満足感と正の関係があり、父親との安定した愛着は生きることへの疲れと負の関係があったが、全般的に両親との安定した愛着はウェルビーイングとあまり関係がなかった。それに対して、親友や恋人との安定した愛着はほと

んどウェルビーイングの尺度と関係していた。このような結果は、大学生という年代が主たる親密な関係の相手が両親から親友や恋人といった横の関係へと移行していく時期に相当することを反映するものといえる。ただし、幼児期に形成された養育者との間の愛着関係が青年期や成人期以降の人間関係のあり方の基礎となるという見方に代表されるように、愛着というものは人格構造に深く浸透するものとして捉えられている。そうであるなら、青年期に親友関係や恋人関係が発達するにつれて親子関係の比重が軽くなるといった側面を捉えるのに愛着という概念や尺度を用いるのが最適であるのかも一考すべき問題であろう。

茂垣 (2005) は、何かに向かって方向づけられている人格すなわち志向性が高い人格を、志向性が高く主体的に「～したい」と考え葛藤が少ない自我理想型人格と、志向性が高いが「～しなければならない」と考えてしまい自らの主体性を自由に発揮することができない超自我型人格に類型化し、両タイプの特徴を測定する尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討するとともに、精神的健康性の指標との関連を検討している。尺度は、志向性因子とべきの専制因子からなり、自我理想型人格は志向性が高くべきの専制が低いタイプ、超自我型人格は志向性が高くべきの専制も高いタイプと特徴づけられる。違和感のなさ、自尊心、充実感といった精神的健康性の指標との関連をみると、志向性はそれらと正の相関を示し、べきの専制はそれらと概ね負の相関を示した。これにより、同じく何かに強く方向づけられてはいても、べきに縛られているか、柔軟で主体性を保っているかで健康な人格とそうでない人格に分かれることが確認された。

おわりに

以上のようにこの1年間の人格領域の研究についての概観を行ってきたが、それを通して感じたことを最後にいくつかあげておきたい。

第一に、人格のさまざまな側面を測定する尺度が盛んに開発されているが、異なる概念名称の尺度が似たような側面を測っていたり、同じような概念名称を冠している尺度がまったく異なる構成になっているなど、相互の関連が不明なままに尺度が乱立気味であるように感じられる。同じ概念を捉える尺度であるなら同じような構成をとるのが自然であり、あえて異なる構成をとるものが並立する場合はそれぞれの特徴や用途の違いが比較をもとに明示されているのが望ましい。そうした観点からの尺度の整備が必要であろう。

第二に、尺度の問題と重なるが、人格の特定の側面を表す概念も乱立気味であるように感じられる。2変数間

の相関が潜在している第3の変数によってもたらされている場合があるのと同様に、ある人格概念(変数)によって説明されている行動特徴が、実はその概念を用いなくても別の概念で適切に説明可能であることもありうる。したがって、個々の概念の検討を精密に行っていくことが大切である。人格を表す諸概念が整備され、概念間の関連も明確化されることにより、個人の行動を状況との関係において説明できる人格構造を明示できるようになり、諸概念を表す変数を素材に個人の人格を体系的に記述し理解できるようになることが期待できる。

引用文献

- 阿部美帆・今野裕之 2005 状態自尊感情尺度の作成の試み パーソナリティ研究, **14**, 125-126.
- 天谷祐子 2004 質問紙調査による「私」への「なぜ」という問い—自我体験—の検討 発達心理学研究, **15**, 356-365.
- Brown, J. D., & Dutton, K. A. 1995 The thrill of victory, the complexity of defeat : Self-esteem and people's emotional reactions to success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 712-722.
- Crocker, J., & Luhtanen, R. 1990 Collective self-esteem and ingroup bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 60-67.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. 1995 Human autonomy: The basis for true self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York: Plenum Press. Pp. 31-49.
- 榎本博明 1998 「自己」の心理学 サイエンス社.
- 榎本博明 2000 自己に関する研究動向—研究文献数の推移— 自己心理学研究, **1**, 85-93.
- 榎本博明 2004 自己物語の心理学における基本的な視点—自己を物語するという行為に焦点をあてて— 人間学研究, **2**, 31-40.
- 榎本博明・稲本和子・松田信樹・梅垣 武 2001 自尊感情に関する概念的検討 大阪大学教育学年報, **6**, 141-149.
- 家接哲次・小玉正博・田上不二夫 2004 抑うつ因果モデルの検討—抑うつスキーマと抑うつの関連— 心理学研究, **75**, 353-358.
- 伊藤正哉・小玉正博 2005 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, **53**, 74-85.
- 伊藤 拓・竹中晃二・上里一郎 2005 抑うつの心理的要因の共通要素—完全主義・執着性格・非機能的態度とうつ状態の関連性におけるネガティブな反すうの位置づけ— 教育心理学研究, **53**, 162-171.
- James, W. 1892 *Psychology : Briefer course*. New York : Henry Holt. 今田寛(訳) 1993 心理学(上・下) 岩波書店.
- 上地雄一郎・宮下一博 2005 コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, **14**, 80-91.
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達:生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, **10**, 189-198.
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, **31**, 292-302.
- 勝谷紀子 2004 改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度の信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, **13**, 11-20.
- 小堀 修・丹野義彦 2004 完全主義の認知を多次元で測定する尺度作成の試み パーソナリティ研究, **13**, 34-43.
- Kroger, J. 2000 *Identity development: Adolescence through adulthood*. Thousand Oaks, CA; Sage Publications. 榎本博明(編訳) 2005 アイデンティティの発達—青年期から成人期— 北大路書房.
- 茂垣まどか 2005 青年の自我理想型人格と超自我型人格の精神的健康—志向性とべきの専制の様相の観点から— 教育心理学研究, **53**, 344-355.
- 内藤まゆみ・鈴木佳苗・坂元 章 2004 情報処理スタイル(合理性—直観性)尺度の作成 パーソナリティ研究, **13**, 67-78.
- 大谷保和 2004 自己志向的完全主義の2側面と自己評価的抑うつ傾向の関連の検討—統制不可能事態への対処を媒介として— 心理学研究, **75**, 199-206.
- 岡田 努 2005 自己の発達と共感性の関係についての探索的研究 自己心理学, **2**, 14-25.
- Pelham, B. W., Hetts, J. J., & Kuwano, M. 1995 Two roads to self-adoration : Implicit and explicit egoism in acculturating and acculturated Asian-Americans. Manuscript submitted for publication (Pelham, B. W. 1995 Further evidence for a Jamesian model of self-worth: Reply to Marsh 1995. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 1161-1165 より).
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ : Princeton University Press.
- 清水紀子 2004 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ 発達心理学研究, **15**, 52-64.

谷 冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造
—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理
学研究, **49**, 265-273.

谷(仙谷)真弓・山崎勝之 2004 児童用外的統制性質問
紙 (GEQC) の作成と信頼性, 妥当性の検討 パーソナ

リティ研究, **13**, 1-10.

山岸明子 2004 女子青年がもつ現在の対人的枠組みと
生育史に記述された母親及び友人との関係の質との関
連 発達心理学研究, **15**, 195-206.